



動物レスキュー通信

2018年8月 第63号 (平成30年8月1日発行)

発行元
一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財團

詩月(しづく)：詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
ペット災害危機管理士 三級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

私の愛猫、今まで一緒に暮らしてきた子は合計7匹。拾つて来た時から既に病気で、すぐに虹の橋を渡つてしまつた子もいます。が、「この愛猫たち、病気で亡くなつた子、老衰で亡くなつた子、そして現在は1匹」になつてしまつたので、みんな、年齢はあまり違はず、その差は2歳ほど。病気で亡くなつてしまつた子以外は、17歳～19歳まで生きただけではなく、世間で「フバ」「オノア」「マル」として人間と一緒に生活している愛犬、愛猫の寿命は、「この30年ほどの間に飛躍的に伸びました。なぜ、これほどまでに寿命をのばす事が出来たのか」と云ふと、その背景にはペットフードの普及や品質の向上、飼食環境の向上による栄養状態の向上、獣医療の発達(新しい医薬品の開発や治療可能な疾患の増加)、飼養方法の浸透や向上(飼い主さんの健康管理・病気予防、早期発見、早期治療などの意識の高まり)などがあげられます。飼い主さんと「ワンちゃん・ネコちゃんとの間柄は昔とは大きく変わり、親子や兄弟のようなパートナー的な関係になり、それに伴い、多くの飼い主さん達は「パートナーに元気で長生きしてほしい」と望むようになりました。そして現在はその望みが叶つてきていると言えます。しかしその望みが叶うという事は、それと同時にパートナー達は飼い主さんの「元で年老いて行く」という現実が待ち構えています。彼らは次第に高齢が原因で病気を発症したり、介護までも必要になる可能性もあります。そしてその後には飼い主さんがパートナーを

愛犬、愛猫の死について



死について



看取る事となります。しかし、飼い主さんの中でもパートナーの介護や看取りについて、そのノウハウを身につけている方はどれくらいいるのでしょうか？恐らく、大部分の方が持ち合わせていないと思います。

介護に関しては金銭面の心配はありますか、プロの方も存在しますので、相談してみる事も出来ます。しかしパートナーの死に直面した時の心の持ち方に関しては、そういうわけにはいきません。しかし、人間も動物も、命あるものに関しての死については避けた通る事の出来ない問題です。実際私は6匹の愛猫とお別れしてきました。その中でもガソと闘つて亡くなってしまったネ「ルカ」とお別れした事がとても印象に残っています。ルカとの思い出や彼女が教えてくれた事などをまとめ、映画として来年劇場公開するため、6月に韓国釜山で撮影をしてきました。私は本人役として演じる事となつたのですが、その時、改めて命あるものの死について考えました。

の貴の上で最期を迎えるケースが多く、その臨終の様子を見る機会もありました。そうする事によって悲しさと同時に人の死と言うものを自然と受け入れてきていました。しかし、現代は核家族化が進み、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいる家族は少なくなっています。それがではなく、病院で死の瞬間を迎える人が多くなり、立ち会える機会が減りました。その為、身近な人の死と言つものを自然と受け入れる事が困難になり、受け入れにくく事となつてしまい、命あるものにすれば死が訪れると言う事を頭では理解していても、心では受け入れにくくなってしまつて、身近で大切な人や愛犬、愛猫の死に直面した際に大混乱をしてしまうのです。しかし愛犬、愛猫との永遠の別れは必ず訪れる事。その死をどう受け止めるのかを、それが訪れる前に考えておいてください。それは飼い主さんの義務だとも言えます。病気の場合も、どこまで治療を受けさせるのか、病気の状態でも、大らしく、猫らしい生活をどこまでさせてあげられるのか、延命措置を取るのかなど考える事はたくさんあります。私の場合は安楽死を勧められましたが、一生懸命に生きている姿を見て、安楽死の決断はできませんでした。ですが、愛犬、愛猫がとても苦

死について考える大きさ

死と言つものは昔からある事で、それは人間も動物も昔から、本能として捉えてい るのだと思ひます。しかし現代人はそれを受け入れにくい環境にあるような気がします。いうのも、昔はおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいる事も多く、ひつ屋根の下に家族がたくさんいて、身近な人がだんだんと年老いて行く姿や、自宅

の費の上で最期を迎えるケースも多く、その臨終の様子を見る機会もありました。そうする事によって悲しさと同時に人の死と言うものを自然と受け入れてきました。しかし、現代は核家族化が進み、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいる家族は少なくなっています。それだけではなく、病院で死の瞬間を迎える人が多くなり、立ち会える機会が減りました。その為、身近な人の死と言つものを自然と受け入れる事が困難になり、受け入れに困り事となってしまい、命あるものにいすれは死が訪れると言う事を頭では理解していくも、心では受け入れにくくなってしまいます。ついで、身近で大切な人や愛犬、愛猫の死に直面した際に大混乱をしてしまうのです。しかし愛犬、愛猫との永遠の別は必ず訪れる事。その死をどう受け止めるのかを、それが訪れる前に考えておいてください。それは飼い主さんの義務だとも言えます。病気の場合も、どこまで治療を受けさせるのか、病気の状態でも、犬らしい、猫らしい生活をどこまでさせてあげられるのか、延命措置を取るのかなど考える事はたくさんあります。私の場合は安楽死を勧められましたが、一生懸命に生きている姿を見て、安楽死の決断はできませんでした。ですが、愛犬、愛猫がとても苦しそうであるなどして、あまりにも犬らしい、ネ「らしい生き方が出来ないようならば楽に逝かせてあげるのも愛情なのかも知れません。いくら辛さでも答えは出ないかも知れません。しかし飼い主さんが真剣に考える事が、愛犬、愛猫の幸せを考える上で、とても大切な事だと思います。死を否定せず愛犬、愛猫を看取る事は終生飼育の大切な一部であり、看取れる事は幸せな事なのだと考えましょう。多くの犬ネ」が飼い主に看取つてもらう事が出来れば不幸な犬猫が減るはずです。